
小さなプレゼント

市丸乱菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さなプレゼント

【Nコード】

N7708H

【作者名】

市丸乱菊

【あらすじ】

夏祭りのお祭りに市丸ギンが幼馴染の松本乱菊にプレゼントしたものは・・・？子供のときのお話。

「お祭り？」

「うん！せやからな、一緒に行こつや」

「でも、あたしお金もないし……」

乱菊がうつむく。

「そんなん気にせんと、二人で一緒に行こなw」

ギンが乱菊の手を取る。

「う、うん。」

乱菊は強引なギンに目を見開く。

ギンがこう言うには理由があった。

今日はたまたまお祭り準備で荷物を運ぶという仕事が見つかったのだ。

流魂街の子供が仕事なんかできることなど、ほとんどのないのだから、運がよかった。

本当にお小遣い程度だが、仕事をしてお金をもらってきたのだ。

「ほな行こか」

二人は手をつないで小屋を後にした。

乱菊にとってもギンにとっても、お祭りなんか好きじゃなかった。お金もないし、家族もない。

親に物を買ってもらう子供を見ると、無償に嫉妬した。

お菓子を食べてる子供を見ると、腹立たしかった。

二人ともそんな思いしかしたことがなかったのだ。

去年の9月29日に二人が出会って10ヶ月くらいだが、家族のよ
うな存在になっていた。

一緒にいるだけで安心できるようになっていた。

二人でいる安心感……

小さいながらもやっと二人は居場所をみつけたのだ。

きれいな浴衣の女性や男性たちが同じ方向に向かっていた。
だんだん人も多くなる。

明るい光、太鼓の音。

沢山のお店。

「うわー。提燈がキレイ。」

乱菊がようやく笑った。

「来てよかったやろ？」

ギンが微笑みかける。

「うんっ！」

乱菊は思いっきりの笑顔でこたえた。

露店はいろいろな店があった。

「乱菊っ！魚つりだってw」

「本当だwあっちにお菓子も売ってるんだねえ。」

「ほんまや。ちょっと待つといて。」

乱菊とつないでいた手を離して、一人で消えた。

「ギン？どこいくの？」

人が多くてどこに行ったのかわからない。

「わっ！！」

乱菊の後ろからギンが驚かす。

「うわっ！もうっ！！ギンっ！！！！！！！！」

乱菊が怒っている。

「わっはっは・・・！wwごめんなあ・・・クックク。」

ギンはおなかを抱えて笑う。

「もうっ！」

腕組みをしてそっぽを向く乱菊に、

「はいつ。」

つと乱菊の唇に何かをつけた。

「飴玉買ってきてん」

包み紙をちらつと見せた。

「え？そんなの買ったら・・・んっ」

無理やり飴を口に押し込まれた。

「甘い・・・おいしい・・・」

「ほんまに？ほなボクも食べよ」

ギンも飴を口に放り込んだ。

「ほんまおいしいなあ」

「うんっ♪ありがとうギン」

小さいながらも、ギンは思った。

乱菊が楽しいなら・・・うれしいならそれでええんよ・・・
君の笑顔が好きやねんから。

「あつ・・・。」

ふと乱菊が立ち止まる。

「ん？どないしたん？」

乱菊が何かを見つめてる。
小物屋さん？

「んーんwいこっ」

乱菊がギンの背中を押して先に進もうとする。

「今何か見てたやろ？」

強引に立ち止まり、乱菊を問いただす。

「え？」

「なにや？」

「これ・・・かわいいなと思って。それだけだし。」

「首飾り？」

コクンとうなずいて、指をさす先には、キラキラ光る宝石のついた首飾りがあった。

うーん。

さすがにこれは高そうだ・・・。

「なあおっちゃん。これなんぼ？」

「１００００環になるよ。」

そっけなく言われた。

「１００００環・・・・・・・・・・」

ギンも乱菊も目を丸くしている。

「なあおっちゃん。１番安いのはどれや？」

ギンが聞く。

「安いのかぁ・・・。その丸いのついた銅のやつなら５００環だよ。」

「これ？キラキラしてへんなあ・・・もうちよつとまかれへんか？」

ギンが言った。

「ちょ・・・ちよつとギン・・・」

乱菊が袖を引つ張る。

「あんちゃん、その子にあげるのかい？」

「うん！」

「あんちゃんみたいに小さい子がえらいっ！！まけて300環でいいよ。」

「ほんまに？買っわっ！！！」

「毎度あり♪大事にしたりやw」

「ありがとうおっちゃん♪」

トントンと話が進んでしまつて、乱菊はついていけなかった。

首飾りを受け取ったギンは、

「乱菊、目えつぶつて♪」

「え？」

乱菊は素直に目をつぶった。

「はいっ！」

ペンダントを首からかけた。

銅色のリングのついた首飾り。

「ありがとう……ギン。」

乱菊は本当にうれしかった。

けれども、どうしていいのかわからず、動けなかった。

「ほな行こか」

「うん。」

二人はまた手をつないで歩き始めた。

「なあ乱菊……」

乱菊を見ず、進路方向を向いて歩いたままでギンが話しかける

「うん？」

「ボクいつか死神になるんや。」

「死神？」

「うん。そしたらな、いっぱいお金稼いでもっと綺麗な首飾り買つたるからな……。焦らんと待つといてな……。」

ギンも乱菊も少し頬を赤らめた。

「うん。」

「ギン……。ありがとう。」

乱菊は、はっと目が覚める。

そして気がつく。

夢だと……………

「なんか懐かしい夢だったなあ…………。」

そう言って胸のペンダントをぎゅっと握った。

そう、今も大事にいつも身に着けているペンダントだ。

あんなこと思い出すなんて…………。
重症かなあ…………あたし…………。

ギン…………。

あんた今どこに居るの？

一人にしないでよ…………。

えらい懐かしい夢見たなあ．．．．

そないな夢みたら、会いとうなるやんか．．．．

乱菊．．．．

君は今何してんかなあ．．．．

あの首飾り、死神になってからもつけてたなあ．．．

ボクが虚圏来てからはもう、つけてくれないんやろうなあ．．．

・

約束の物を今素直に渡せたら．．．．

こない悩まんでもええのになあ．．．．

乱菊．．．．

離れて初めてわかる．．

こんなに愛おしかったんやって．．

おしまい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7708h/>

小さなプレゼント

2010年10月9日04時59分発行